



作家  
元国際線乗務員  
**黒木安馬**

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、(株)日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に「成「幸」学」(講談社)、「あなたの人格以上は売れない!」(プレジデント社)、「出過ぎる杭は打ちにくい!」(サンマーク出版)、「面白くなくちゃ人生じゃない!」(ロングセラーズ)、「リセット人生・再起動マニュアル」(ワニブックス)、「小説・球磨川」(上下巻・ワニブックス)などがある。  
E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www.3percent-club.com

## 21世紀だ! ————— 人生・農業リセット再出発 121

# 機内にお医者さんはいませんか!?

**福岡在住**の医師、坂本泰樹<sup>やすき</sup>さんの電話が鳴る。日本旅行医学会の篠塚専務理事からだった。「末期癌患者さんの米国旅行添乗ですが、先生のご都合はいかがでしょうか?」「8月23日以降なら大丈夫ですが」と、日程がほぼ決まる。

成田空港の出発ロビーで、車椅子に座ったままの高澤基<sup>もと</sup>さんと初対面の挨拶をする。高澤さんの妹さんと、ボランティアで付き添う女性もいる。いよいよ4人で米国へ向けて“人生最期の旅”への出発である。空港のテレビでは、奇しくも高澤さんと同じ65歳、芸能リポーターの梨元勝さんが肺癌で亡くなったニュースが流れている。

高澤さんは都内の信用金庫で60歳の定年まで勤めた後、生涯独身で一人暮らしを楽しんでいた。ところが病院の検診を受け、かなり転移が進んだ末期の食道癌だと判明。余命数カ月の宣告を受ける。2歳年下の妹は、働き盛りだった夫を骨髄癌で亡くしている。そして今度は兄が末期癌! 高澤さんは中学生時代からエルヴィス・プレスリーの大ファンで、社会人になってからもハワイで開催されるコンサートに参加したくて会社に休暇申請したが、上司に無下に却下された悔しい思い出がある。兄の無念を覚えていた妹は、その夢を生きているうちに叶えてあげたい、そうだプレスリーの故郷であるテネシー州メンフィスに連れて行ってあげようと決意する。旅行会社では車椅子の重病人同行はすぐに断られた。何とか方法はないか……探し当てたのが日本旅行医学会であった。

車椅子でオムツをつけた息も絶え絶えの病人に同行する8日間の米国旅行、楽なはずがない。坂本医師は不眠不休で付き添い、自ら浴槽に入って

高澤さんをホテルの風呂に入れたり、レンタカーを運転して長距離移動したり、運転手、ガイド、通訳、介護士、次々に起こるトラブル対処など、連日が旅行社の業務以上、それでいて診察や手当ての医師業務も行なうという八面六臂の“添乗医”であった。

プレスリーが住んでいた豪邸の前で、高澤さんは残る力を振り絞るように親指を立てて最高の笑顔で記念写真に納まり、懐かしい曲に足でリズムを取る。だが、帰国の頃には容態は目に見えて悪化していった。帰りの便では、あまりの重体な様子に航空会社から搭乗拒否に遭い、坂本医師の必死の説得でようやく離陸できたほどであった。

帰国して10日後。高澤さんの棺には、プレスリーのTシャツやCD、思い出の写真が収められ、霊柩車は大きく長くお別れのクラクションを鳴らした。「旅行しなかったなら、もっと生きられたのでは?」との問いに、坂本医師は言う。「高澤さんは念願の夢を果たし、この世に何の未練もなく心安らかに旅立たれたと思います。これぞ私がやりたかった医師としての仕事。余命少ない貴重な終末期をいかに有意義に過ごすか。残される家族にとっても重要なことです」

坂本医師は、著書『機内にお医者さんはいませんか?』を出版。死ぬ前にどうしても行きたい場所があるのに夢を断念している人たちのために添乗する医者、『空飛ぶドクター』を目指している。いつでも、すぐに一緒に飛べるように、あえて開業医ではなくフリーでいるのはそのためである。

明日がくるのが当たり前じゃない日が、すぐあなたにも迫っている。人生を楽しく生きるのに、遅すぎることはない!